

---

# 魔法少女の世界に転生とかしてみる

八雲家の使用人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女の世界に転生とかがしてみる

### 【Nコード】

N0919Z

### 【作者名】

八雲家の使用人

### 【あらすじ】

魔砲少女な世界に転生してしまった主人公。少年時代からやり直しになり、思うようにいかない日々。取り合えず、頑張っ生きてようと思います。能力微妙だけど。／／／注意 この作品には、ハレム・ご都合主義・主人公最強などの成分を含みます。そういうのが苦手な人はご退場ください。

## 転生とかしてみる(前書き)

はじめまして、八雲家の使用人です。

進む妄想が抑えられず、ついにはやっつけてしまいました。反省はしている、だが後悔は(r y

ストーリーが適當すぎる。設定も適當。ご都合主義エ

批判お断りです。批判するなら読まないで下さい。

それでもおっけーね！な人はどうぞ先にお進みください。あなたが勇者か。

## 転生とかしてみる

日常というのは何事にも変えがたい大切なもので、変わることに無いもの。

そう考えていたのはいつのことだっただろうか？

まだ小さい小学生だったか、それともヤンチャした中学生だったか、はたまたアホした高校生の頃だったか。

少なくとも、俺という存在にとって、普通というものはごくごく当たり前前で、変わる筈のない日常だったはずだ。

俺という人間は、ごくごくどこにでもいる高校生　とは少し言いがたい、オタクによくありがちな転生というものに憧れている男だった。

変わらない日々を過ごし、家に帰ってはゲームやアニメ三昧。学力は日々少しずつ低下していき、進路について日々悩む日常を送っていた。

なりたいものや、夢はなく、目指すものもない。そんな中で二次創作でよく見かける転生などといったものは魅力的で、憧れた。

人生をやり直したい。そう思っていたことは1度や2度ではなく、日々そう考えていた。

だけれど、そんなことは現実になるはずもなく、日々同じようなことを機械的に繰り返す日々。

そんな日常だったが、少なくとも、そんな日々に満足していた。

だけれど、そんな日常は脆くも崩れ去り、自分が死んだと自覚することも無く、俺はあつというまに命を落とした。

## 転生

どうやら、俺には転生をする権利が与えられたらしい。

もちろん、日々憧れていた夢のようなことを断るはずもなく、転生をした。

運のいいことに、能力を与えられて、アニメを何度も見直した「魔法少女」の世界に転生されるらしい。

この時、テンションが上がってあまり考えずに能力を口に出した俺を殴ってやりたい。能力には欠陥があった。

もらった能力はこれだ。

ff 召喚獣などを召喚できる「召喚の才能」とff 零式のセツナ卿並の召喚の才能、魔力を吸い取る「魔力吸収」。

あまり強大な力は渡せないとのことで、この能力を選んだのだが、充分チートな筈のこの能力がOKとのことだったので、コレにした。直前までしていたゲームがffだったので、たまたまこれしか思い浮かばなかったというのも理由だが。

さて、この能力のどの辺りが欠陥能力かというと、召喚とはすなわち魔法である。魔法ということは当然「魔力」がいるわけで。

ぶつちやけると、強大な召喚獣を召喚できるほどの魔力がなかったのだ。具体的に言うと、魔導師ランクC+相当。

当然、強力な召喚獣なんて呼べやしない。そのための「魔力吸収」だったのだが、こちらにも欠陥能力だった。

「魔力吸収」には条件がある。相手に触れること。それが大前提であり、そうしなければ吸収できやしない。

触れるためには近接格闘しなければならぬし、そのためには強くないといけない。つまりは、どちらにしろ魔力が必要で、ろくに吸収できやなかった。

じゃあ、雑魚相手に吸収を繰り返していればいいかと聞かれれば、それも駄目だった。

どういふことかというところ、魔力はあくまで吸収できるだけで、限界値　つまりはC+以上の魔力を蓄えることはできなかったということだ。現実是非常である。

悲劇はこれだけではなかった。

俺という転生者は、親というものが存在しなかった。

9歳ぐらいの縮んだ体に転生し、気がついたら高層ビルの立ち並ぶ、ミッドチルダと思わしきところにいた。

当然、お金なんてものがあるはずもなく、サービスと思わしきミッド語を理解できたのは良かったが、文字を書くことをできなかった。

路地裏を彷徨っていると、大人の管理局員と思わしき人たちが現れ、助かった　なんて最初は思ったりしたが、地獄の始まりの間違いだった。

思い出して欲しい。管理局の上層部が何をしていたかを。

連れて行かれて先ずやらされたのはスキャンである。早い話が、

魔導師適正があるか、片っ端から調べられたのだ。何人もの子供がスキャンされ、適正ありと適正なしに仕分けされる。

適正なしはどこかに連れて行かれ、適正ありにはデバイスが支給された。

「今から、貴様らには仕事をしてもらう。よく働いた者には衣・食・住を保障してやるが、役にたたん奴らは研究所行きだ。死なない程度に頑張ることだな。」

デバイスを手にした俺達に、言われた言葉はこれだけだった。

その場できちんと理解できていたのは恐らく、外見とは違う精神を持つ俺だけだっただろう。

安物のストレージデバイスを手にした俺達は、バリアジャケットと簡単な魔力弾、それとバリアの仕方だけを教えてもらい、すぐさま仕事に放り込まれた。

目にしたのはまさしく殺し合い。

非殺傷設定なんてものはないかのごとく、魔法が飛び交い、周りの子供、少年、大人が傷つき、倒れていく。敵は質量兵器を使ってきたり、遺法魔導師だったり、とにかく非殺傷なんて生温いことは

言ってられなかった。

殺らなきゃ、殺られる。そんな世界。

後々考えたのだが、俺は運がよかったのだろう。C+という魔力、レアスキル有りとのことで周りより多少魔法を学習されたストレージのデバイス、「魔力吸収」という魔力を長持ちさせるレアスキルに召喚魔法。召喚魔法に関しては、さすがはセツナ卿と言うべきか、簡単な召喚魔法なら使えることができた。

コレだけあって、生き残るのが精一杯。他人を蹴落とし、のし上がり、ようやくできた僅かな余裕も全て戦闘訓練に使わなければ生き残ることすらままならない日々。

原作介入なんて考えれる余裕なんてあるはずもなく、そこにある知識から少しでも強くなるつと足掻かなければいけない。

転生なんてしなければよかった。

そう思うようになるまで、時間はかからなかった。

**転生とかしてみる(後書き)**

取り合えず、一区切り。

もう、内容が適當すぎるwwwさすがのりとテンションとその場の  
思いつきで構成されてるだけあるwww

なんかシリアスっぽいこと描いてあるけど、実際そんな小説になら  
ないかも。

誤字などあれば、報告してください。誤字に定評がある俺ですから。

どうしてこうなったw

謎の機械とか戦ってみる(前書き)

2話目を投下。

別にそんなにストックとか作ってるわけじゃないけど。

超展開になるかも。

## 謎の機械とか戦ってみる

「慣れる」

人間とは恐ろしい生き物である。

他の生き物とは違い、高い学習能力を持ち、自我を確立させて思考することができる。

2年。

この世界に来てから、それだけの年月が経った。相変わらず、俺達のような存在の日常は変わらないもので、生きるか死ぬかの世界を彷徨っていた。

魔力は魔導師ランクBランク相当になっていた。さすがは成長期というべきか。酷使しすぎたせいというべきか。

地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 三等陸士。魔導師ランクは陸戦魔導師Cランク。

それが俺の今の肩書きであり、2年の成果でもある。

「対違法魔導師部隊」

その名の通り、違法魔導師を取り締まる部隊であり、俺の所属する糞部隊である。

発足したのは結構最近のことで、そんなに長い間あるわけではないが、どこぞの権力者がもっと上にのし上がりたいがために出来た部隊である。

無茶いつて作ったため、規模も小さく、予算なんて唯でさえ資金不足な陸に、こんな部隊まで回す金などある筈もなく、雀の涙ほど。

そのため、人材を雇えるはずも無く、それでも上に行きたかった上司がやったのは、路頭を迷う子供を使うこと。

魔導師適正を調べて、適性あれば儲け物。なければ研究所に売り飛ばすという方法で金にするという違法手段にでた部隊であり、けれど、世間はそんなことは知らない。対違法魔導師部隊が犯罪を犯してどうするんだか。

対違法魔導師部隊といっても、活躍しているわけでもないの、仕事はえり好みせず表では派遣任務とかで他の部隊に行ったり、人材不足のところを手伝ったりしており、世間的な認識は「便利屋部隊」。

もちろん、労働基準法？なにそれおいしいの？と、地球の自分が言いたくなるくらいの重労働で違法魔導師の依頼があれば、それもきちんとなしている。

陸戦C、魔力はB相当の俺は、完璧な戦力扱いで、違法魔導師の取り締まりや、ランクにあわない任務など、もっぱら年中戦闘のしっばなしで、何度も倒れた経験があるが、治療が終わり次第即戦場行きと、死線をさまよってばかりだが。

俺のやってきたことをそのまま俺の功績にしたのならば、もっと上にいけた筈。のだが、そこは上司が見事に掻っ攫っていきり、いまだに三等陸士。恐らく、このままあがることはないだろう。

新暦67年 冬

11歳になった俺は、今日も今日とて死線をさまよう。

今回の任務は、とある世界での足止め任務。

数が相当いる正体不明の機械（ガジェットと思わしき敵）との戦闘が俺達の任務のだが、陸戦Cである俺が最高戦力というまさしく自滅しにきたような任務であり、本格的に使い捨てるつもりなだろう。

上にとって、俺達価値のないクズのような魔導師はポイ捨てるゴミと同程度なだろう。

バンバンと激しい音がなり、あちこちで戦闘が始まる。

「オラッ！」

『ブリッツアクション』

俺は軽い掛け声とともに、手に持つ剣型アームデバイスを振る。

その特定動作に反応してデバイス無機質な機会音声をだし、腕の振りなどを高速化させる魔法であるブリッツアクションを発動させる。

ガキンツと、剣がガジェットと衝突し一瞬抵抗するも、前世よりも遥かに高くなった身体能力でごり押しし、剣を振りきる。

その場に立ち止まっていると、他から攻撃されるのですぐさまその場を離れると、倒したガジェットが爆発し、焼け跡を地面に残す。

「やっぱり、ガジェットか」

付近にガジェットが居なくなったので、アンチ・マギリング・フィールドAMFの効果がなくなり、魔力の消費効率の良くなった身体強化を途切れ途切れに発動させ、次の敵の居場所へ向かう。

すれ違い様に、近くに居たガジェット？型を、ブリッツアクションで加速した攻撃で破壊していく。

え？AMF内では魔法の発動は出来ないんじゃないかって？

それにはきちんと理由がある。それは、魔力をできるだけ圧縮させて魔法を行使しているからだ。

つまり、魔力が完全にかき消される前に、魔法を発動してしまう。そうすれば、例えば「ブリッツアクション」なんかは、加速した後は魔法をかき消されようとスピードを維持するだけでいいので、火力はあがる。

投げたボールは、その後力を加えてやらなくても真っ直ぐ飛んでいく。それと同じだ。

移動を続け、目の前に現れたのは？型が5機。

これはちょっときついな。しょうがない、魔法を使うか。

「揺らめく焔、猛追！」

『ファイアボール』

詠唱文を使い、魔法を起動させ発動する。足元にはミッド式でもベール方式でもない召喚魔法特有の魔方陣が展開され、魔法が出現した。眼前に現れたのは5つの炎球。真っ直ぐ飛ぶように加速した炎球はガジェットに直撃に、かき消されることなく破壊する。

これは俺が生き残るために編み出した魔法の一つだ。

俺の召喚魔法は、なにもf f召喚獣だけに適用されるわけではない。それを応用し、他世界から精霊を召喚、使役し、魔法を発現させる。この時発現した魔法は、精霊の力を借りた自然現象。なのでAMFは効かないのだ。詠唱は特に決まっておらず、自分のイメージにあった文にするとより強い力が顕現する。

え？詠唱文がどこかで効いたことあるって？気にしない、気にしない！

「はあ、やっぱりガジェット相手はやりづらいか。魔力のない機械だから魔力吸収ができないし あんまり調子に乗っていると魔力が尽きるな。」

剣の構えを一度解き辺りを見渡すが、辺りには何も無い。

どうやら、ここいらはあらかた片付いたみたいだな。 まあ、この辺はあんまりいなかったし、仲間が心配だ。できるだけすぐ戻った方がいいだろう。

俺はそう判断して踵を返し、仲間の下に向かっていくが、そこで足を止めることになった。

《全員撤退しろ、繰り返す。全員早急に撤退しろ。》

突如飛んできた念話に足を止め、思わず本部があるであろうところ

を睨みつける。

《戦闘不能者はいつも通りこちらで全員回収する。正体不明の機械は残っているだろうが、気にせず早急に撤退しろ。管理局本局期待のエース様のご登場だ。》

本局期待のエース様　　ああ、主人公の高町なのはか。まあ、こちらとしては助かったがな。

回収。いつもの生命力を使った転移魔法か。

俺の所属する対違法魔導師部隊には、転移の力をもったペンダントが支給されている。それはなぜか。

簡単な話、部下を捨て駒にして違法行為をしていることをバラしたくない上司を作った、使用者の生命力を吸収し発動させる転移魔法だ。転移先は本部で、死ぬ直前になると根こそぎ魔力を奪い取り、強制的に発動させる魔法だ。死体を回収し、隠蔽するために。

上司はその所は才能あったみたいで、大量生産はできないが、人数の少ない俺達の分くらいは作れるらしい。忌々しいことに、死体からペンダントを回収し再利用。これで抜け穴の分も困らないってやつだ。

本当に、嫌な部隊だ。これだから嫌いなんだ、管理局は。

謎の機械とか戦ってみる（後書き）

どうしてこうなったw

私アニメしか見てません。間違った知識等あれば、ご指摘ください。

無理やり修正します。

疑問点などあれば、どうぞ感想まで。

原作介入とかしてみる（前書き）

3 話目投下。

今日はこれが最後です。

## 原作介入とかしてみる

走る。

撤退命令が出たので、所々効率的に魔力で身体強化をしながら高速移動し、雪の積もっている大地を駆け抜ける。

本部までの距離が近くなってきたのだが　少々離れすぎたか。

「？」

違和感を感じ、空を見上げる。

エリアサーチを使いたい所だが、あまり魔力を使ってられない。もったいないからだ。

さて、どうしようか。と悩んでいると、本部から念話が届いてきた。

《何をやっている！！結界なんぞに捕まりおって！》

ああ、そうか。この違和感は結界か。

だとすると、周りに被害を出さないようにするためかな。白い悪魔様が魔砲を撃つと、しゃねにならない被害になるしな

内の部隊にも是非ともほしいところだ。そんな結界張れる結界魔導師が、内にいるわけないしな。

《ちっ！コレだけ頑固な結界だと、破壊しないで転移は無理だ。仕方ない、貴様は援護でもして活躍してこい。幸い、便利屋部隊呼ばわりの俺達の部隊なら、いても問題ないだろう。》

《 了解しました。 》

俺は走るスピードを落とすし、耳をすませて戦闘しているであろう方向を見極める。

まったく、面倒なことに巻き込まれたもんだぜ。

所変わって戦闘場所。

そんなに離れていなかったようで、走り出してすぐに到着した。まあ、結界の範囲内なんだし、そんなに離れているわけがないのだが。

ドガンッ！ドガッドガンッ！

「 派手にやってるな。 なんだあの馬鹿魔力は？」

到着したと同時に目に入ったのは、極太桃色閃光ビーム。アホほど魔力を撒き散らし、ガジェットのアMFを問答無用で突破して、シューティングゲームの雑魚キャラを打ち落とすかのごとく破壊していく白いバリアジャケットのツインテール少女。その近くには、ガジェットを打ち砕くように破壊するチビっ子もいる。

いや、チビっ子は失礼か。

「無駄に空中の魔素濃度が濃い。これなら、空中にも立てそう  
だ。」

脳内で術式を組み立て、レアスキルを応用し、魔素を足元に集めて固める。

魔力で軽く身体を強化し、ジャンプした後、そのまま空中に立ち、さらにもう一段ジャンプ。それを繰り返し少女達の下へ跳んだ。

「助太刀、しましうか？」

突然話かけられたにも関わらず、ヴィータと思わしき少女はビクリとしなかった。流石は百戦錬磨の騎士。恐らく気配で気づいていたのだろう。

「お前、どこのどいつだ。」

こちらを振り向かず、鉄球を呼び出し、手持ちの武器をフルスイング。打ち出された鉄球はガジェットを打ち抜き、撃墜する。

見事なコントロールだな。

「地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 二等陸士です。」

「便利屋部隊か。何で便利屋部隊の三等陸士がこんなところにいるんだ？」

「任務の途中に結界に巻き込まれて、戦闘しているようなので加勢に。」

ようやくこちらを向いたヴィータ（仮）はジーツとこちらを見たあと、再び前を向いた。

「嘘はついてないみたいだな。あたしは武装隊の特務捜査官補佐のヴィータだ。武装隊の演習で来ていたんだが、帰還の途中で襲撃された。」

なるほど。俺達の部隊は、高町達に襲撃しようとしていたガジェットを見つけて攻撃。倒しきる前に高町達がやってきて、ガジェットはそっちを襲撃。あの糞上司は、それを高町達が倒しにやってきたと勘違いしたわけか。

「それで、お前。魔導師ランクは何だ？飛行してるってことは、それなりだと思うが。」

「陸戦Cです。」

「はあ！？おま、そんなんでここにきたのか！？どうやって飛んでる！？」

「魔力を足場にしてます。早い話がレアスキルですね。」

「すっこんでろ！奴らAMFを使ってくるみたいだ。陸戦Cなんかで敵うと思ってるのか！？後はあたしらがやつとくから！」

これだからエリートは。

ランク、ランク。ランクと実力は関係ないだろうが。

そりゃ、普通は関係あるかもしれないが、あくまで普通ならだ。俺の場合は力の功績も正等評価されてないし、力が特殊だ。多分総合B+ぐらいはあると思う。

相性もあるし、ガジェット？型程度に遅れをとるつもりはない。

「そうはいいますけど」

「いいからさつさと」

軽く右手を横向きに突き出し、魔法を発動の用意をする。

レアスキルを発動。術式にねじ込み、魔力結合阻害を力技で突破し、圧縮する。

空気中の無駄に濃い魔素を吸収し、右手に集め、術式に魔力をながし、魔法陣に魔力を留める。消費した魔力はさらに吸収で補給に流し込む。コレを繰り返すことで、大技が可能になる。編み出した応用の一つだ。ただし、今回みたいに無駄に空気中に魔素がないと使えないけどな。

因みに、スターライトを参考に思いつきました。

充分魔力が溜まったところで、2メートルくらいの魔法陣が右手に顕現する。

「ひっこん で？」

グイータが啞然としてこちらを見ている。

使えない雑魚かと思いきや、いきなり大技っぽい魔法を行使しようとするれば、まあそうなるわな。普通。

「盟約に従い、我レンヤ・カワカミの名の下に顕現せよ」

詠唱文は、本来存在しない。精霊の力を借りた魔法、仮に「精霊魔法」としよう。精霊魔法と同じで、イメージが大事なのだ。決まった文はいらぬ。より正確にイメージすることにより、消費魔力は変わる。

「来たれ、炎の魔人。『イフリート』」

『コール サモン イフリート』

魔法陣が眩い光を放ち、顕現されたのは炎。

灼熱の炎は形を変え、変化し、炎の魔人へと姿を変える。

「殺れ、イフリート。『地獄の火炎』だ。」

顕現したイフリートは俺から魔力を奪っていき、炎を収束させ、解き放った。

広範囲にばら撒かれた火炎は、機械を焼き尽くし、破壊する。

「」

「(やっべ、思ったより魔力を持っていかれるな。これで魔力C級の召喚獣かよ。通常の俺なら5分も持たないぞ。)」

唾然としているヴィータを見ながらそんなことを考えていた俺だが、思ったより魔力を持っていかれて結構焦っていたりする。

この状態でもう一体の方の召喚獣を維持できるかどうか

「それで、俺が何をすれば？」

「あ、ああ。このままある程度破壊を頼む。」

「了解！」

ヴィータの返事を聞いた俺は、イフリートを単身で突っ込ませた。

あんな魔力を喰らう技なんか、何度も使えるかっての。

その後の俺は、イフリートを維持した状態でちまちまと攻撃し、辺りのガジェットを破壊した。

相変わらず桃色閃光は飛びかっていたので、いつ巻き込まれるかひやひやしたが、射程長すぎなんだよ！味方巻き込む気か！！

「おい、そっち終わったか？」

戦闘終了したので、顕現させていたイフリートを還していると、後ろから声を掛けられた。

考えるまでもない。ヴィータだ。

「こっちは終了です。武装隊の皆さんも無事みたいですし、一見到着ですかね？」

「そうか、助かった。礼を言う。AMFがあったからな。あたらだけじゃ時間が掛かっただらうし。」

「あ、ヴィータちゃん！大丈夫だった？心配したの！」

俺がヴィータのお礼に返事を返そうとすると、ヴィータの後ろから奴がやってきた。

白い悪魔である。

「それは、こっちのセリフだぞ、なのは！毎回無茶しやがって。大体、AMFを砲撃で無理やり突破するなんて何を考えてるんだ。」

「にははは、出来そうだったから」

「そついう問題じゃねー！この際言つ「あー？」　なんだ？  
いまあたしは、なのはと話してるんだ。」

「いや、そうじゃなくて。そちらさんはどなたですか？」

もちろん、俺が言っているのは高町のことである。

一応知ってるが、不審がられないようにな。

「ん？ああ、そうかお前は知らなかったな。こいつは

」

「高町なのはっていうの。よろしくね、えっと      「レンヤです。レンヤ・カワカミ。」      「レンヤくん！」

なんだか知らないけど、名前を嬉しそうに呼ばれた。訳分からん。

それと、ヴィータ。俺が知ってるはずないじゃないか。普通は。紹介くらいするのが普通だと思っただが。別段知りたい訳でもないけど。

さて、この時点で俺はすっかり忘れていた。この時起こる出来事を。だから反応が遅れてしまったのかもしれない。

高町の後ろから迫る、ステルス機能と騎士服を易々と貫く攻撃力を有するガジェット？型の存在に。

「      ツ！高町ツ！後ろだ！」

「え？」

高町とヴィータが俺の声に反応して俺の方から顔を逸らし後ろを向くと、近くまで迫っている蜘蛛に似た多脚ガジェット。足を振りかぶり、今にも突き刺しそうだ。

「ッ！？」

そう、この時点なら、高町のアホみたいに硬いバリアが間に合うはずだった。そう、はずだった。

急に加速し振り向きながら魔力を練り上げるその動作。それが、負担だらけでポロポロだったリンカーコアを刺激し、高町に硬直を与えた。

「なのは！？」

「くそっ！」

そのとき、俺はやっと思い出した。高町なのは撃墜事件を。

何で思い出さなかったのか、数分前の自分を殴り飛ばしてやりた  
い。

エリートは嫌いだ。優秀だし、自分に出来ないようなことを平然とやってのけるし、こちらの気持ちを理解してくれないし。

だけれど、自分には見捨てるという選択ができなかった。

何か抵抗したわけでもなく俺はあっさり死に、転生先では自分が無力なばかりに周りで死んでいくやつがいる。

ズルしてもらった能力を使って、一度死んだ身で周りを見捨てて生きていく。そんな自分の罪滅ぼしの自己満足かもしれない。だけど、目の前で助けられる分のことくらい、やってもいいだろ？

いつもは無理だけど、今は空气中に魔素がいっぱいあるから。

3回の動作、ソレに反応して、まだ解除していなかったデバイスが反応する。

『アクセルフィン ブリッツアクション ソニックムーブ』

速度強化系の魔法の三重掛け。普段なら一気に減る魔力で気絶だとかするけど、そのうち二つは魔素で肩代わりしている。

視界が変わる。あまりの速さに、強化している視力が追いついていない。そんな中で高町だけ抱えるとか器用なことではできなくて。

出来たのは、何故か頭に直撃コースの足から盾になって変わりに腹をぶっ刺されることだった。

激痛が腹を襲い、血が大量に腹から噴き出して、意識を失いかける。

刺さった足を、振り払うように振り回され、足から取れた俺は地面に落ちていく。

無様だなあ。俺。

原作介入とかしてみる（後書き）

相変わらず超展開。

ちよつとしたら設定もだそうかと。

これって読む人いるのか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0919z/>

---

魔法少女の世界に転生とかしてみる

2011年12月3日16時06分発行